ノートから飛び出る

greentea0117

ノートから飛び出る

　デッサンするのが好きだ。別にデザイナー志望でもなんでもない。ただのフリーターだ。デッサンするものはなんでもいい。目の前にあるテレビでも、昨日テレビに映っていたラッコでもなんでも。手を動かせばいつのまにか、画用紙の上にテレビやラッコが現れる。
　これは子供のころからの、癖だった。退屈な授業中、することのない暇な日曜日、私はノートの隅に絵を描いた。最初は遠慮がちに、いつしか堂々と。ノートは絵で一杯になったけれど、誰に見せるでもなかった。
　いつしか見たもの想像したものを、思った通りにデッサンできるようになっていた。鉛筆と紙を前にしたときだけ、私の背中には翼が生えた。私にとって絵は、自分だけの楽しみ。あのおせっかいな女に会うまで。
「ねえ、妙にうまいけど、っていうか、うますぎない？」
　バイトのロッカールームでノートに絵を描いていると、同じフリーターの福留がのぞきこんできた。
「うんそうかな、ありがと」
　そういうふうに言われたときに返す常套句を、この時も言った。
「うんそうかなって、あんた」
　福留はなおも言う。
「うんそうかなで終わらせる域を、超えてると思うんですけど」
「何、福留って、絵とかそういうの、詳しいの？」
「ううん、全然。でも誰が見たってすごいじゃん」
　その時、私は竜の絵を描いていた。竜が悠々と空をいく姿だ。
「なんか絵から飛び出てきそうじゃん、その竜」
　福留はあっさりとそう言った。私は改めて自分が描いた絵を見た。
「うーん、そうかもね」
　ノートをリュックにしまおうとすると福留は、
「ねえ、そのノート見せてよ」
　と言った。私は溜息をついた。
「次のバイトに行かなきゃいけないから」
　不服そうな福留を残して、ロッカールームを出る。ノートを持っていないと、私はどうも落ち着かないのだ。
　福留からメールがあったのは、それから一か月くらいしてからだ。
『なんか有名な画家の展覧会してるけど、興味ある？』

　私は展覧会になんて行ったことがなかったし、そもそも福留自身、展覧会になんて興味があるのだろうか。好きな漫画家の原画展なら、少しは興味も湧いただろうけど。
『あんまり興味ないけど展覧会って行ったことないから、福留が行くんなら行くけど』
『じゃあ明日、三時に美術館で』
　私は福留がメールに貼りつけてきた、美術館のＵＲＬを開く。
　大きな美術館の前で、福留はぽつねんと待っていた。
「バイトが立て続けに休みになって、佐野くん、行くかなーと思って」
「うん、ありがと。でも俺、そういうアート系？　目指してるわけじゃないけど。休みの日って寝てばかりだから、嬉しかったよ」
　美術館の中は、静かだった。そう言えば子供の頃、遠足か何かで展覧会に行ったことがあったかもしれない。多分そのときは、ただ退屈しただけだっただろう。私は絵を、じっくりと眺めた。色の向こうにデッサン線が見えた。そして色は、目に楽しかった。私は思った。デッサンだけで、色がついているかのような、立体的な絵が描けないものだろうか？
　美術館の中に喫茶店があって、私たちはそこに入った。私はコーヒーを頼み、福留は大きなオムライスを注文した。喫茶店は港に面していて、大型クレーンがおとなしい動物のように、等間隔に並んでいるのが見えた。
「これノート、見る？」
　私はリュックからノートを取り出した。
「ほんと、いつでも持ち歩いてるんだね」
　福留は目を丸くした。そしてノートをぱらりぱらり見ていたけれど、
「なんかこれ、オムライス食べながら見ていいもんじゃないね？」
　と言って、がつがつと食べ、
「は？　別にいいけど」
　と言う私を無視して、早々に食事をすませた。
「なんか、すげーじゃん」
　ノートの一枚一枚を、福留はさっきの展覧会の絵のように丁寧に見ていた。私は次第に頬が紅潮した。福留の、乱雑に切られた艶やかな髪を眺めていた。